

メラネシアの村落構造

— 土地所有を中心に —

石川 榮吉

一 序 言

メラネシアの人と土地とが、広く世界に知られるようになったのは、いうまでもなくマゼランによって開かれた太平洋の発見時代以後のことに属する。一六世紀中華の一連の発見——アドミラルティ諸島 Admiralty Is. (一五二八年)、Alvaro de Saavedra (一五二九)、ニューギニア北岸 (一五四五年)、Yligo Ortiz de Retes (一五四九)、ソロン諸島 Solomon Is. (一五六八年)、Alvaro de Mendaña (一五六九) など——を端緒として、爾来四世紀ほどの間に、メラネシアは徐々にその相貌を明らかにしてきた。今日なお、ニューギニアの内奥部に、文明との接触をまだにもたない『未知』の地が多少残されていることも事実であるが、大抵の島々の事情は、地域による精粗の差はあるにせよ、すでにかなり明るみに出た。

メラネシア人とその生活様式に関する、民族誌的もしくは民族地理学的情報は、初期の航海者や探検家の記録中に散見する

断片的な記載に始まり、宣教師や植民地行政官の手になる、多少なりまとまった記録に引き継がれ——その代表的なものとして、今日、メラネシア研究の古典として評価される R. H. Codrington の著作⁽¹⁾をはじめ、A. K. Smith (2) や W. G. Ivens⁽³⁾ などの仕事を挙げることもできる——、次ぎに A. C. Haddon, F. Speiser, R. Thurnwald, W. H. R. Rivers, B. Malinowski らに嚮導された、専門学者によるインテンシヴな現地調査を通じて、現在までにその蓄積は相当な量に達している。⁽⁴⁾ この地域を対象とする専門雑誌として、シドニー大学を拠点に一九三一年に創刊された季刊の『オセアニア誌』『Oceania』も、すでに三八巻を送りだし、第二次大戦後には、急速に進んだ文化・社会変化の現実に対応して、一九六三年以来オーストラリア国立大学に設置されたニューギニア研究班から、地理学者、民族学者、経済学者などの手になる、今日のニューギニア事情の実態調査報告が、逐次刊行されるようになった。⁽⁵⁾

本稿は、これらの調査報告の類を資料として、とくに、土地

所有の問題を中心に、メラネシアの村落の構造を探ることを課題とする。従来この種の試みとしては、H. I. Hogbin と C. H. Wedgwood との共同研究⁽⁶⁾、および E. Schlessner のもの⁽⁷⁾があるが、どちらも依拠した資料事実の内容記述を省略して、村落類型の分類案を提示したにとどまる。参考とすべき点も多いが、紙幅の関係からここに立入って述べることができない。それらについては別稿を予定している。⁽⁸⁾

本稿では、まず資料事実を記述し、つぎにその分析を行なう。

二 諸 事 例

まず初めに幾つかの事例を呈示する。

一、父系制社会の場合

〔事例一〕 ワバガ

ニューギニア中央高地の住民が欧人によって発見されたのは一九二九年以後のことであるが、その調査研究が始まったのは比較的近年になってからである。それも主として東部にかたより、西部に関する報告があらわれるようになったのは、ようやく一九五〇年代に入ってからであった。⁽⁹⁾ 西部高地管区のワバガ Wabaga 支区⁽¹⁰⁾に属する原住民とその文化を記述した E. H. Haddon の報告⁽¹¹⁾ (一九五三年) は、その先駆的なものの一つである。

エルキンによりワバガ Wabaga と仮称されるワバガ地方の原住民の村は、個々の家族の住居が孤立荘宅状に山腹の森林や耕地の間に散在するのみで、景観的に村の統一を察知し難い。

しかしそれにもかゝらず、村はやはり存在し、しかもその成員構成はかなり安定しているようにみえる。ここでは村は、人口一〇〇人前後、父系出自・夫方居仕婚・外婚の原則にもとづいて結ばれた人びとを中核として成る。したがって、村内に居住する既婚婦人は、すべて他の父系集団の出身者であって、この村の本来のメンバーシップを持たない。しかし、子供らは当然生得的にそれを持つ。ここでは、男子に関するかぎり、原則として生涯を終始自己の村に過すのであり、成員の流動が少ない。

上記のような、村の中核をなす父系集団を、エルキンは氏族に比定しているが、氏族から直ちに個々の家族へ分割されるのではない。景観的把握こそ困難であるが、村の領域は氏族と家族との中間的集団によって分割され、その中に個々の家族がさらに自からの土地を分有し、孤立荘宅を営むのである。この中間的集団は、父・既婚の息子・兄弟という関係で構成されるものであり、エルキンはこれを大家族型の亜氏族またはリニージと呼んでいる。

この亜氏族またはリニージ内部の結合は比較的緊密であると思われる。しかし、氏族もまた決して出自と婚姻規制の機能しか果たさぬ形骸的存在でないことは、村内の適当な場所に方形に伐り開いた集会と儀礼のための広場をもつことからも判断されよう。おそらくは、險阻な地形の制約から生れたこの村の孤立荘宅的景観も、あながちに社会的結合の弱さを物語るものではないのである。

れるに至ることもあると、原報告者は語っている。

〔事例二〕 メンディ

信託統治領ニューギニア西部高地管区の南に接した、オーストラリア領ババア南部高地管区の、メンディ Mendi 溪谷で調査をした Ryan の報告を見ると、この事情も〔事例一〕のツバガに大差ないことが判る。この地方の種族が発見されたのは一九三六年であった。

ここでは、村の人口はおむね二〇〇人未満であり、やはり散村形態をとっている。水害を避けるためと、防禦上の理由とから、家々は山稜付近に数に遮蔽されて点在する。村の成員は、外婚と夫方居住を原則とする一個の父系氏族を中核として構成され、これがさらに、小さな数個の父系リニージに細分される。各リニージは、柵をめぐらしたそれぞれの広場と、その一隅に建つ男子集会所兼若者宿をもつ。

村の領域は、川や沼沢あるいは無人の叢林などの自然物によつて、明瞭に境されている。この領域は、正確に言えば氏族のものであつて、氏族員のみが利用することのできる土地である。リニージの耕地、あるいは個人の耕地は、それぞれにまとまって区画されているわけではなく、村の全土にまたがって分散する。

氏族はまた、ただ一つの村（領域）を所有するだけでなく、複数の村に分かれていることもある。ただし、複数の氏族が一つ村に共同関与し、その土地を分有もしくは共有するというこ

とはない。複数の村に分かれたそれぞれの氏族分節のあいだには、相互に同一氏族員であるという意識が保たれ、外婚規制も働いている。しかし、土地所有や政治をはじめ、生活のほとんどすべての面では、各分節の独立性がいちじるしい。

〔事例三〕 クトゥブ

前例と同じ南部高地管区でも、クトゥブ Kutubu 湖畔に居住する人びとの場合には、異なった村落構造が報告されている。⁽¹³⁾

この地域の人口は、調査が行なわれた一九四〇年当時で四〇〇人以下であつたが、これが五個の村に分かれて住んでいる。村は明瞭に境された領域をもち、その内部に一個の集村をなす。それは一個の長大な（最大のもので六三メートル）男子家屋と、これと対向して一列もしくは二列に並ぶ小さな女子家屋の家並みとから成る。男子家屋には乳幼児をのぞく村の全男子が住まい、女子家屋には文字通り女・子供が住む。しかし、男たちも日中は随時これに出入し、銘々の家庭生活を営む。

ところで、村の成員は、それぞれに外婚と夫方居住を原則とする数個の父系氏族を中核として構成されている。一村に二氏族という例は皆無で、最少で二氏族、最大のものは十一氏族からなる。しかも、これらの氏族の中には、一つの村だけでなく数個の村々にまたがって分布するものが少なくないのである。しかしながら、村を越える氏族の結合は、トーテムを共にし、外婚規制をもつこと以外に、格別のものは認められない。これに対して、村ごとの氏族分節は、村領域内の土地所有の主体と

して遙かに現実的な機能を有するのである。

土地所有について今少し詳しくみると、村の領域は、村を構成する氏族ごとの土地に分けられているが（必ずしも一ヶ所にまとまらない）、その配分は氏族間に均等でもなければ、また人口比に応じて分配されるでもない。どの村にも草分けの氏族があり、これが最も多くの土地を所有している。たとえば、ある村では、四三地片のうち、二七地片までを草分け氏族が占め、残り十六地片を九氏族で分けている。これらの九氏族は、その土地を、斧や真珠母貝を草分け氏族に提供することによつて、得たものと言われる。

氏族の土地に対する権利は、村外に去った者にもなお保有される。しかし、彼が他村に永住して故郷に戻らぬ場合には、その権利はやがて忘れられ、したがって、他村で生まれた彼の子孫にまで継承されることはない。

土地所有はこうであるが、実際の利用ともなればまた別で、所有関係と利用とが必ずしも相掩わない。つまり、利用に際してつねに自己の氏族の土地を耕作するとは限らず、たとえば、草分け氏族の土地に余裕があれば、これを耕すこともできるし、また、村の全員が共同して一つの大きな共同畑を拓く場合には、当然一氏族の土地を全氏族が使用することになる。

こうした事情は、氏族を越える村の社会的結合の強さを暗示しており、事実、土地利用のほかにも、成人式や大きな饗宴や男子家屋の建築なども、氏族ではなくて村が主宰しているのである。

〔事例四〕 アベラム

ニューギニアの北岸に注ぐセビク Sepik 川とその西方のトリセリ Torricelli 山脈とはさまれた地域には、アベラム Abalam と呼ばれる種族が分布している。Margaret Mead の調査⁽¹⁴⁾で有名なアラベシ族 Arapesh はこれに含まれる。そのアラベシに近いマムクンディ族 Mamukundi の場合を、Kaberry の報告⁽¹⁵⁾にもとづいて述べる。

カバリがとくに集中的に調査した村の人口は、約五〇〇人（一九四〇年）、境界の明瞭な領域をもち、政治的な単位として近隣から独立している。しかし、その住民は一個の集落にまとまることなく、山稜に沿って分布する多くの小集落（大きなもので人口四〇人前後）に分散して居住している。各小集落はおむね一個の父系リニージに対応し、それらが数個寄つて一つの父系氏族をなし、そして、村にはかような父系氏族が数個含まれている。婚姻は氏族外婚であるが、村内婚と並んで村外との通婚も多く、また、夫方居住を原則とするものの、妻方居住の例も稀でない。

同一氏族内のリニージは、分裂によって生じたものであるが、これによつて氏族としての結合が断たれることはなく、土地は氏族の所有するところであるし、氏族員の相互扶助の権利・義務も不文律として認められている。リニージが成人式などの儀礼を行なう場合にも、分れた元のリニージの集落の広場を使用する。

土地を所有するものは氏族であるが、実際にはリニージごと

に割り当てられており、これを使用する権利は、原則として父系の男子によって相続される。

ところで、ここに興味深いことは、土地の相続に、ときとして他の氏族員が関与してくる場合のあることである。それはたとえば、ある男が女兒だけしか持たなかったときに起る。こうしたときには、娘の夫が妻方居住をするか、あるいはそうでないまでも、自分の本来のリニージの他にここにも一戸を設け、結局彼自身か彼の子供が、妻(母)のリニージに同化してしまふのである。あるいはまた、家庭内の不和などが理由で家出した男が、母方オジを頼って、そのリニージに同化する例もある。この社会の原則である父系原理に代って、母系原理がこの場合に働いているのである。しかも、このような事態が生じても、人びとはこれを不法行為とみなさず、したがって、正規の氏族員との間に紛争を生ずることもないという。〔事例二〕に挙げたワバガの場合と同様の慣習である。

〔事例五〕 ウォゲオ

ニューギニア北岸、セビク河口沖に幕布するスハウテン諸島 Schouten Is. 中の一島ウォゲオ Wogeo の名は、メラネシア民族学の第一人者とも称されるホグビンの一九三四年の調査によつて、民族学者のあいだに広く知られるようになった。

人口九〇〇余を算するこの島の住民は、海岸ぞいに分布する十数個の村に定住する。各村は、七五—一〇〇名の人口を擁し、集村形態をとるが、その内部は男子集会所を中心として両側に

分れる、通常二個(稀に三個)のグループよりなる。その各グループは、それぞれ一つの父系氏族の男子達と、その妻子達によつて構成される。

土地所有の状況をみると、ここには地目の相違に依じて三種類の異なった形態がある。第一は内陸の原生林地帯で、これは全体が五個の村連合の地区に分けられ(各村連合地区は一四個の村を含む)、各村連合の住民は、当該地区内においては自由にこれを利用し、——狩猟・採集・伐採——、その収穫物を私用に当てる。第二は村周辺の沼沢地で、これは村に所属するものと考えられ、ここに自生するサゴヤシを、村人たるものは誰でも必要に応じて自由に伐採することが出来る。第三は海岸低地にひらける可耕地で、これは氏族ごとの区画に分けられて各氏族に分属し、その内部はさらに、父系男子相続を原則とする各成年男子の世襲的持分に細分されている。氏族区画の内部には、かような個別的持分とは別に、氏族成員の誰もが自由に利用しうる共同区画を含む場合もあるが、ただしその利用法は、共同作業にもとづくものでなく、各自の自由な計画により個別的に行なわれて、その収穫物も、個別的持分からのそれと同様に、私的に消費される。

以上三形態のうち、前二者の場合の原理が、はたして同一地域(村連合地区ないし村)における共住の事実のみであるのか否かが、原報告者によつて明かにされていないのは残念である。たとえば自己本来の地域を去った者が、その後この地域の原生林や沼沢地に対していかなる関係を保つか、というような事実

が明らかにされれば、この点も明確とならうが、さしあたっては、この二形態の解釈は留保せざるを得ない。

第三の形態の土地所有の根拠は明かである。父系氏族の男子成員たるものが、その根拠である。このことは、つぎの事実によつて一層確かめられる。この社会の婚姻居住様式は夫方居住を原則とする。したがって、すでにのべたように、父系氏族の男子達がその妻子を伴つて地域的なまとまりをつくる。ところがこの社会にも時として妻方居住が行なわれ、その結果当該男子が自からの氏族地域を去ることとなるが、それにもかかわらず、彼およびその男子達は、その氏族出自と同様に、彼等の本来の可耕地持分を彼等の氏族地域内にもつのである。すなわち、可耕地の所有は、現住地のいかんにかかわらず、出自によつて支えられているわけである。

しかしながら、ここに注目すべき一つの変則的事態がある。それは女子もまた時に婚資として可耕地を父から分与されることである。この場合、その可耕地を実質的に利用するのは彼女の夫であるが、勿論彼には本来的にその土地に対する何らの権利もあるわけでない。したがって、もし離婚がおこなわれた場合には妻と子どもにその土地は失われてしまうこととなる。しかし結婚生活が持続する場合にはどうなるか。その場合には、彼女の可耕地持分は、彼等の長男によつて相続されるものとされている(この長男は出自上は当然父の氏族に属し、父からも可耕地を相続する)。したがって、この場合に限る母系相続がおこなわれ、その結果は一氏族の土地の一部が、他の氏族成員

の所有下に置かれることとなる。換言すれば、この事態は、氏族成員にあらざる出自上の他所者が、当該氏族の地域内に土地を所有することであり、氏族の土地所有原理が崩されたことにはかならない。

しかしながら、かような事態は決して永く放置されない。正常な事態ができるだけ早い時期に回復されるべきであるといわれ、そのために、母から土地を相続した長男は、今度はこの土地を婚資として自からの娘を、彼の母方オジの息子に嫁がせねばならぬとされているのである。かくて、やがて新夫婦の長男がこの土地を相続するに至れば、二世代わたった異常事態も最終符を打たれ、氏族の正規な土地所有が回復されることになる。

〔事例六〕 マナム

前例と同じスハウテン諸島の南端に位置するマナム Manam 島を、一九三三—三四年に、ウェッジウッド女史が調査している。

マナムには、一九三三年当時約三九〇〇の原住民が、ほぼ海岸沿いに分布する十三個の村に分かれて居住していた。各村は平均二七〇人の人口を擁し、村首長のもとに重要な社会単位をなすが、まとまりのある集落は作らず、叢林で互にへだてられた数個の小集落に分かれている。戸数にして三—九戸から成るこの小集落は、通常一個の父系氏族に対応し、これが土地の所有主体である。小集落には集会所は無いが、bagi と呼ばれる一メートルほどの高さのプラットフォームがあり、ここが男た

ちの座談の場とされている。この *bagi* という言葉は同時に氏族を指すときにも用いられ、小集落と氏族の結びつきをよく示している。

かような小集落は氏族のまとまりにもかかわらず、それらの集合体である村の統合もまた、決して弱くない。村の草分け氏族の住む小集落が、村の政治的・社会的・儀礼的中心をなし、ここに公共広場と男子集会所が設けられ、成人式をはじめ村の公的行事の一切がここで果たされる。木幹をくり抜いた台図太鼓をもつのも村だけであり、この太鼓は村統合の象徴と目される。

ところで、さきに、土地所有の主体を父系氏族であると述べたが、実際の土地の相続にこの原則がつねに適用されるとはかぎらない。マナム社会では、女子もまた土地の相続にあずかることができ、娘もその兄弟と並んで父を通じて父系氏族の土地を相続する。その権利は、結婚によって彼女が他の氏族や他の村の土地へ転出した場合にも持続し、したがって、婚出した妻達は、夫の氏族の土地を耕す一方、しばしば里帰りをしては、自分の本来の氏族の土地も耕すのである。もちろん、氏族外婚の規制はあるが、村内婚が普通であるから（一九三三年当時、六〇六組の結婚のうち七六％が村内婚）、こうした二重の耕作も、さしたる困難ではなかったのである。このかぎりでは、土地相続における父系原理の貫徹ぶりを、むしろよく示していると言つてよいが、この女子による土地相続を基盤としてつぎのような事態が起ると、それは原則にもとることと言わなければ

わけがなく、むしろ複雑に交錯しているのが常態である。

土地が個人別の世襲的分に細分されているとはいえ、このことだけで、直ちに私的所有とみなすわけにはいかない。土地の譲渡や土地をめぐる係争には、必ずリニージの規制が働くし、だいいち、土地が個人名でなくリニージ名を帯びていること自体を注意する必要がある。

女子には原則として土地の相続権がない。しかし、前記の例とひとしく、この場合にも例外はあり、たとえば、娘の夫が相当額の花嫁代償 (*Bride-price*、豚を主とする) を支払った場合には、娘の息子に若干の土地の相続を認めることもある。ただし、これには正規の所有者である父系リニージに一二頭ほどの豚を贈って、その許可をえる必要がある。娘の息子はリニージを異にするから（リニージ外婚）、これは異分子がリニージの土地に権利をえたことを意味する。

こうした変則的な相続の別の例に、青年が母方オジから土地を相続する場合がある。つまり母系相続である。この相続は正当な権利となされるのではなく、土地不足の場合に、青年が母方オジへ十頭内外の豚を贈って懇請する。その相続には、母方オジの属するリニージの許可を、とくに要しない。しかし母方オジとオイの間柄をのぞく、他の親族の間でこうした変則的譲渡を行なうためには、譲受人から譲渡人のリニージに対して、豚を贈って承諾を求める必要がある。

(187) このようにして獲得された、正規ならざるリニージの土地は、獲得者の父系の男子子孫によって相続されていく。しかし、相

ならない。

この社会の結婚居住は、夫方居住を原則としているが、女も土地をもつために、時として妻方居住婚も起るのである。そしてその子供が、母から土地を相続する。子供は出生地の如何にかかわらず、父の氏族に属するから、この事態は、氏族の土地が他所者によって相続されたことに他ならない。妻方居住をせぬ場合でも、子供らは父系氏族の土地のみならず、母の氏族の土地に対しても、これを相続することができるといふ。このような場合の詳細な分析が、原報告者からえられないのは遺憾であるが、少なくとも、そうした事態を直ちに違法として排斥するようなことは無いようである。

〔事例七〕 ガリア

ニギニア南東岸の要港マダン Madang から西西南西におよそ四〇キロメートル、バガン *Bagan* 地方として知られる丘陵地帯に住む、人口二五〇〇人ほどのガリア族 *Garia* の土地所有について、Lawrence が一九四九年から五三年にかけて調査を行なった。その報告は詳細をきわめており、興味深い資料を多々提供している。⁽¹⁸⁾ 要約して次に述べる。

ガリアの土地は、ガリアを構成する多数の父系リニージ（平均四世代を含む）によって所有され、その所有地ごとにリニージ名を付されている。しかしその内部は、さらに、父系男子相続を原則とする、個人別の世襲的分に細分される。リニージの土地も、個人別のそれも、必ずしも、ヶ所にまとまっている

続人を欠くときには、自動的にもとのリニージに復帰するし、またもし、正当な相続人以外に譲りうとするならば、ここでも本来のリニージに対する豚の贈与と懇請を要する。さらにまた、この土地に付された本来のリニージの名前は、これを変更することを許されないし、何等かの問題が生じたときにも、つねに本来のリニージに規制をうける。しかしながら、本来のリニージの規制が続くのは四世代の間だけで、五世代目になると、その一切の規制が消失して、土地の名前も獲得者のリニージのそれに変わり、ここに名実ともにその土地の所属がリニージ間で移動するのである。

ところで、彼らの居住形態は、人口四〇人ほどの小集落を作つて散在するというが、この小集落を果たして村と認めてよいかどうか、ローレンスの記述では明瞭でない。小集落は、リニージととくに対応することがなく、一つのリニージのメンバーが多数の小集落に分散して、それぞれに他のリニージのメンバーを混じえている。これは、リニージの土地や個人の持分が決して一ヶ所にまとまることなく、所々方々に入乱れて散在していることと関係をもつ。しかもここでは小集落のメンバーが絶えず流動している。というのは、一年耕作、四―七年休閑の焼畑システムのために、散在する土地を順を追って耕作していくうちには、年によって居住地から非常に遠隔な土地に当ることもある。このような場合に、居住地を耕地の近くの集落へ移すのである。ローレンスの言葉をかきうならば、ガリアの「地域組織と土地所有とは、函數関係にあるとみなすことができる」。

〔事例八〕 カバウク

インドネシア領ニューギニア（西イリアン）の中央を東西に走るナツソウ Nasseu 山脈の中西部には、今なお文明界との接触をたえてもたない多数の種族が居住している模様である。その一つであるカバウク族 Kapauku の存在が Pospisil の調査によつて初めて明るみにでた。調査は、一九五四—五六年の間に、前後二回通算一年十ヶ月に亘つて行なわれたものである。カバウクはウィッセル湖群 Wissel Lakes をめぐつて分布する推定四五、〇〇〇人ほどの大種族であるが、ポスピシルが直接調査したのは、上記湖群の西方に当るカム Kambu 川流域のグループである。

カバウクは父系制社会であり、フラトリ——氏族——リニージ——亜リニージという組織形態が認められる。フラトリ——は、共通の始祖神話とトーテム・タブーとにもとづく、二個以上の氏族の連合体であるが、その結合はゆるやかで、如何なる政治的・経済的機能ももたない。外婚規制もなく、固有の名前も、また、この連合体を指す言葉自体も無い。これに対して、氏族は、共通の出自觀念とトーテムに結ばれるほか外婚規制をもち、また固有な名で識別される集団である。しかし、地域的なまとまりをもたないために、日常的な諸機能を果たすことはできない。

地域的なまとまりをもち、土地と密接に結合しているのは、リニージおよび亜リニージである。リニージは、地域的にまとまった最大の親族集団で、一つ集落に住み、その固有の領域に

おいては、メンバーの誰もが、どこにでも家を建て、土地を耕し、採集・狩猟・漁撈をすることができる。メンバー相互のあいだに同一集団への強い共属意識があり、政治的にも法的にも統合度が高い。何らかの理由で領域外に住む者も、潜在的なメンバーシップを保ち、領域へ戻る時には、直ちにその完全な資格を回復することができる。リニージが大きい場合には、数個の亜リニージに分れ、それぞれの亜リニージが、リニージの土地を分割して所有する。そして、上記したリニージの諸機能を亜リニージが果たすこととなる。このときには、亜リニージごとに集落も分れる。一集落には通常家数にして十五戸、二〇人前後の人口を含む。

集落に住む者は、この領域にメンバーシップを持つ正規のリニージ（または亜リニージ）の成員のみとは限らない。婚入してきた配偶者たち（夫方居住）に、正規のメンバーシップがないことは勿論であるし、その他にも何らかの理由による寄寓者を含むこともある。これらの他所者は、リニージ（または亜リニージ）の長老の承諾（暗黙にせよ）のもとに、はじめて居住を許されるのである。集落は、焼畑その他の事情によつて移動することもあるが、その場合にもリニージ（または亜リニージ）の領域の範囲を出ることは決してない。

二、母系制社会の場合

〔事例九〕 ドブ

ニューギニアの南東端に近く、ダントルカス諸島 D'Entrecasteaux Is. がある。その一小島ドブ Dobu の名は、これを調査した Fortune の研究で Ruth Benedict が彼女の著名な文化様式論中に、いわゆる「偏執狂的な文化」として引用して以来、甚だ喧伝されるに至った。われわれもまたここから資料を借用しよう。

ドブには四—二〇村から成る、村落連合体ともいふべきものを認めることができるが、これは通常その内部で結婚が行なわれるほか、戦時に共同するだけで、他に格別の機能をもたない。土地所有との関係で重要なのは、村である。村は人口一五人ほどからなる小集落で中央に共同墓地をもつ。村人は、susu (母の乳の意) と呼ばれる母系リニージもしくは氏族のメンバーとその配偶者から成る。この母系血縁集団が村の土地の所有主体である。ススまたは氏族内での結婚を禁じられているので、配偶者は必ず所属する血縁集団を異にする。

ところが、この社会の婚姻居住の形式は、選択居住 (ambulatory) の変則的なものであって、夫婦が隔年に双方の村に交替に住むのである。したがって、ある年に妻の属するススの村に住むと、このときには、妻と子供らがこの村にメンバーシップを持つのに対して、夫は他所者として卑屈に過ぎなければならぬが、その翌年になると今度は、夫のススの村で、妻と子供らが他所者としての生活に甘んじなければならぬことになる。すべての財産——土地・建物・タロの種子・農耕呪術——はススを経て相続される。それゆえ、子供らは父を通じては何一つ相続することも、権利を主張することもできないばかりか、

父母の生存中には、父母に従つて隔年に父の村に居住していたにもかかわらず、ひとたび父が死ねば、そのとき以後、全くの他所者として、父の村に出入することさえ許されなくなるのである。父の死体を引取り、その葬儀をするのも、父のススの人びとであり、その妻や遺児はこれに関与しない。父の財産は母系の原理にしたがつて、父の姉妹の子供ら（つまり、父を失なつた子供の交叉イトコ）によつて相続される。

ただし、無形の財産である呪術だけは、父から子供らに伝えられることもある。日常生活で接触の多いのは、正規の相続人である女系のオイよりも、実の子供のほうであるから、呪術のような無形の財産については、こうしたことが可能となる。しかし、これは半ば非合法な行為であつて、もしオイが要求するならば、息子が父から相続した呪術のうちオイの知らぬ部分は、これをオイに改めて伝授する義務がある。もちろん、その逆の關係は成りたない。

〔事例一〇〕 トロブリアン

ドブ島のやう北に、ボヨワ Boyova 島を主島とする大小の珊瑚礁から成る、トロブリアン諸島 Trobriand Is. が横たわる。この小さな群島の存在は、マリノフスキーのいわゆる機能主義的人類学の実験の場となつて以来、にわかに有名となつたが、次にここから資料を引用しよう。

この村は、主として集村形態をとり、しかもそのプランは、立地条件による多少の変化にもかかわらず、原則として次のよ

うなものである。すなわち、中央に公共広場をめぐってヤムイモの貯蔵庫が円形に排列し、その外側に住居の列が第二の環をつくる。そして貯蔵庫の列と住居の列との間には、やむ市広な道路が環状に走るのである。集落間はおよそ二・四キロメートルの森林をへだて、その森林が順次焼畑によって拓かれていく。耕地として常時開墾されている面積は、森林の五分の一から四分の程度である。

かように求心的な集落のプランは、何か社会生活の上にも統一的なものを暗示する。事実、村はここでは社会的に重要な単位をなし、村ごとに首長をもつばかりか、耕地の開墾・儀礼・交易など、重要な仕事はいずれも村共同で果たされる。

村々にまたがって四個のトーテム氏族があり、この氏族が亜氏族に分れ、そしてそれぞれの亜氏族が村に結びつきをもつ。亜氏族のメンバーは、集落の近くの穴から出てきたといわれる女性祖先の母系の後裔であり、肉体的に一つものと信じられている。村は、実際の居住の如何を問わず、このような亜氏族に属するものとされている。

婚姻規制は氏族外婚であり、オジ(母側)方居住を原則とする。すなわち、異氏族間で結婚が行なわれると、新夫婦はそれぞれの両親の家を去って、夫の母方オジの村に行き、そこに新家庭を営む。夫は母系のつながりによって当然その村にメンバーシップをもつが、妻にはこれがない。子供らにも当然その村の成員権は無い。なぜなら、子供らは母系の原則にもとづき、父とは出自・相続の点で無関係であり、専ら母方オジが住む村

にのみ、潜在的な(そして、特に男子の場合には、結婚とともに現実化される)メンバーシップを持つものだからである。

かくてトロブリアンドでは、別条ないかぎり、人が生涯を通じて一つ村に住み続けることがなく、村の核心をなす母系につながる既婚男子たちも、いずれも幼少年時代は夫々別個の村に生れ育ち、結婚後初めて交際をとり結んだ仲間にはすぎないのがある。女子の場合ともなれば、生涯を通じて自分が生得的なメンバーシップをもつ、自分の亜氏族の村に住むことがない。生れ育った村は父の亜氏族の村であるし、結婚すれば今度は夫の亜氏族の村に住むことになるからである。

しかしながら、マリノフスキーの表現によれば、子供と母方オジとの関係が「法と権利・義務」のそれであるのに対して、父と子の関係は、「親しい個人的つながり」(生物学的な意味の血縁認識は無い)である。したがって、つねに本心から子供を思い、そのために苦勞するのは父であってオジではない。父は子供には、その欲しがるものを何でも惜しみなく与えるが、オイに対しては、やむをえず義務的に与えるにすぎない。この行為は、正規の相続人であるオイの側からみれば、甚だ不満なことである。そのため、オジ・オイの間、あるいはイトコ同士で紛争を生ずることもある。マリノフスキーはこの事態を、「法の正統的理解と、現実生活の慣習との矛盾」と求めている。

こうした矛盾を緩和するために、トロブリアンドでは、しばしば父方交叉イトコ婚(patrilateral cross-cousin marriage)にもとづいて、オジ方居住ならぬ夫方居住を強行するという。

すなわち、父Aが息子BをAの姉妹の娘C(Bからみて patrilineal cross-cousin に当り)と結婚させるならば、息子Bが父Aと氏族所属を異にするにもかかわらず、Bの嫁CはAと氏族を等しくし、Aの村に正規のメンバーシップをもつわけである。そこで、嫁のこのメンバーシップを根拠にして、新夫婦(BとC)をBの母方オジのもとに行かせずに、父Aの手もとに置くという方法である。このようにすれば、新夫婦の子供(Aの孫)は、母系原理にしたがってAの村にメンバーシップを持つばかりか、その村に生涯を送ることが可能となる。しかし、こうした方法も、オジ方居住が慣習であるというトロブリアンド社会の規範の名のもとに抗議を受けるときには、これに譲らなければならない。父方交叉イトコ婚を行ないながら、父の村に留まりえなかつた例もあると、マリノフスキーは述べている。

【事例一】 クアヌア

ニューマルク群島 Bismarck Is. の主島、ニューブリテン New Britain の東北隅は、ガゼン半島 Gazelle P. の名で知られるが、そのまた東北端に当る要港ラバウル Rabaul の後背地には、一般にトーライ族 Tolai と呼ばれる人口三・〇〇〇ほどの種族が分布している。このグループはラバウル沖のデューク・オブ・ヨーク諸島 Duke of York Is. の住民から、クアヌア Kuanua の名でも呼ばれている。ここでは、原報告者 Trevitt にしたがって、クアヌアの名称で記述する。⁽²³⁾

クアヌアの社会は、トロブリアンドと同じく、母系出自でか

つオジ(母側)方居住婚を原則としている。したがって、男子は結婚とともに初めて、自分のメンバーシップのある母方オジの村に住む。花嫁代償を支払うのは、父でも母方オジでもよいが、父が支払った場合には、後にこれを返済しなければならぬ。母方オジの場合には、その必要がない。村は数個の小集落から成り、各集落並びにこれに属する土地が、それぞれ母系リニージのものとしてされている。つまり、一つの村は、複数の氏族のリニージから構成されるわけである。

村には、集落間の距離が接近していて、村としてのまとまりが一目瞭然のものもある一方、集落相互が遠くへだたて、村としての景観の把握が困難なものも少なくない。いずれの形をとるにせよ、村人のある程度の連帯と統一があることは事実で、たとえば舞踏や饗宴とともに催すのも村である。しかし、土地所有との関係で重要なのは、上にも触れたように、リニージと結びついた小集落である。その土地には、宅地たると可耕地たるとを問わず、すべての地片に当該集落の名前が付されており、たとえ、ある集落の住民が死に絶えた場合でも、他のリニージや氏族のものが、この土地に住むことは許されないのがある。

【事例二】 ノヌ

ニューブリテンと並ぶニューマルク群島の主島の一つ、ニューアイルランド New Ireland の、北岸にほどに位置するレズ Lesu 村の社会を、Powdermaker 女史が一九二九年に調査して、⁽²⁴⁾

つぎに、ここに資料を求める。

女史の調査当時、レズ村の人口は二三二人をかぞえ、これが海岸に沿って延長約五キロメートルに亘って分布する。五戸の小集落に分かれ住んでいた。集落と集落の間は叢林でへだてられ、集落ごとの景観の独立性がいちじるしい。各集落は二戸から八戸の家から成る小さなものであるが、それぞれの名前を持つほか、男子集会所、墓地、炊事場を共にし、いちじるしく共同性の強い生活を営んでいる。亜氏族がこの小集落に対応する。これに対して、村は多数の氏族から成り、そのあるものは村を超えて広がっている。それにもかかわらず、村は特定の区域を持ち、一人の首長と何人かの長老によって統制された、政治的独立体として機能している。

氏族への所属を規定する出自は母系であり、婚姻居住様式は前二例と異なつて妻方居住を原則とする。したがって、女性が生涯を同一村の同一集落（自己の亜氏族）の中で送るのに対して、男性は結婚とともに妻の集落に移り、そして死後再び自己の出身集落の墓地に帰る。

土地所有に関しては、二種類を区別することができる。その一つは氏族有地である。氏族メンバーの生き霊が棲むと信じられている小面積の聖地がそれで、通常実用性をもたないが、かりに、耕地などとして利用する場合でも、決して氏族の手から流出することはない。たとえば、その土地が氏族メンバーの居住地から遠いために、それに近い他氏族の者に耕作を許すことがあったにしても、耕作者は、収穫の一部を正規の所有者であ

る氏族に渡さなければならぬし、ましてや、これを子孫に相続させることなどできないのである。彼が死ねば、土地は自動的に持主の氏族の手に復帰する。

土地所有の他の種類は、一般の可耕地に関するものである。

これは、上記の聖地（氏族有地）をのぞいて、海ぞいに約五キロメートル、内陸へ向けて八、十キロメートルの広がりをもつ村の領域である。この土地は、村に集落をもつ多数の母系亜氏族の全員の共有地であつて、そのメンバーは誰でもが、意のままに何処でも耕すことを許される。亜氏族ごとの所有地に分割されているわけではない。そして、この権利は、現在どこに住むかによって制限されることがない。したがって、結婚によって妻の村に移った男性も、自分の出身村の土地に関してその権利を保有するわけである。欧人との接触以後、土地を欧人に譲渡するケースを生じてきたが、その場合、婚出して現にその村に住まぬ男たちも、当然の権利として譲渡金の分配にあずかることができる。一方、男が婚入してきた村（すなわち妻の村）が土地を売却した場合には、妻と子とは分配金にあずかるが、男にはこれを受ける資格がない。母系出自によって規制されるからである。

【事例一三】 タンガ

ニューアイルランドの東に浮かぶ小さな火山島群タンガ Tanga Is. の土地所有に関して、Bell の詳細な報告がある。⁽²⁵⁾

タンガ諸島の人口は、ベルの調査当時（一九三三年）に約一、

七〇〇を算し、これが十三個の母系氏族に分類していた。氏族は必ずしも地域的なまとまりをもたず、土地に密着しているのはリニージである。しかし、このリニージも集落としては密林のあいだに散村形態をとつて、景観的なまとまりを示すことがない。それにもかかわらず、リニージも氏族も、特定の領域を持ち、その境界は万人によって認識されている。

土地に二種類が区別される。その一つは可耕地で、これはリニージの所有するところであり、リニージの正規のメンバーならば、随意に耕すことができる。個人別の持分に細分されることはない。他の一つは、耕作に不向きな採集・狩猟地で、氏族に属する。氏族員であるが、自由な使用が許されるから、たとえば、A氏族のアリニージに属する者が、同じA氏族のブリニージやクリニージの近くの採集・狩猟地に向いて、そこで獲物をうることも可能である。採集・狩猟地は、氏族との間に霊的な結合をもつと信じられている。こうしたリニージや氏族の土地に対する、メンバー外の者による侵犯は、かつては死罪を以てむくいられたという。

母系制社会であるから、氏族やリニージへの所属は母を通じて迎られ、したがって、上記の土地に対する権利も、母方オジから相続することになる。婚姻居住は、トロブリアンドやグアヌアと同じく、オジ（母側）方居住である。ところが、興味深いことにトロブリアンドに見られたと同様の変則的事象が、ここにもまた見られるのである。ベルによると、そうした変則は、（一）死者が富裕な有力者であるか（二）父と息子と

のあいだに強い愛情のキズナがあるか（三）海その他の地形的障碍によって、母方オジの土地への交通が困難であるか、の

いずれかの場合であつたという。こうした場合、結婚しても男性はそのまま父のリニージに住み続け、その土地を利用してもらう。しかし、これはあくまでも、父のリニージや氏族の好意によるものであつて、如何なる意味でも彼の正当な権利ではない。彼は父の村では他所者にすぎない。それゆえ往々にして、感情的なトラブルを生じ、長居を歓迎されないようにもなる。それで、これもまたトロブリアンドと同様に、父方交叉イトコ婚（父の姉妹の娘との結婚）がしばしば行なわれることになる。父の姉妹の娘は、母系の原理によって、父の村に正規のメンバーシップを持つから、他所者扱いをされる男も、彼女の夫たることによって、その村における地位をやゝ安定させ、さらに、息子が生まれるならば、その父たることによって、その村に住む理由を正当化することができるからである。いうまでもなく母系の原理によって、息子はその村のリニージの正規のメンバーである。

【事例一四】 シウアイ

ソロモン諸島の北部に位置するブーゲンヴィル Bougainville 島は全島山がちな峻阻な地貌を呈しているが、島の南西隅にやゝ広闊なブイン Buin 平原がある。ここは、かつて今世紀の初めにトゥールンヴァルト夫妻が調査を試みたところであるが、⁽²⁶⁾一九三八—一九三九年に、O'Brien が再度詳細な調査を行なった。⁽²⁷⁾

彼の調査の主対象とされたのは、ブイン平原の西部に分布する、バプア系のモツナ Motuna 語を使用する原住民、通称シウアイ族 Siuai であつた。

シウアイ族の社会は、六個の母系氏族から成り、そのおのが、さらに多数の母系リニージに分かれる。氏族はトーテムをもち、その成員が参加すべき儀礼をごく稀に執行する（通常一世代に一回程度）が、オリヴァーの表現によればシステムをなさないのであつて、日常的機能の点では、母系リニージが遙かに重要である。というのは、実際のな土地所有の単位、すなわち村のメンバーシップを保持するのは、このグループに他ならないからである。

村は一九二〇年代の初期以来、同島を支配する濠州政府の統治目的から、大きな集村へ統合されつつあるが、元来は五、六戸程度の家屋から成るごく小規模なものである。そしてこの村はまた同時に、一つの大家族に他ならない。しかるに、この社会では特定の婚姻居住様式を欠き、いわゆる ambilineal residence であるため、大家族Ⅱ村の現実的な構成員は、母系父系とりどりのキズナにつながる者を含むこととなり、本来この村に生得的メンバーシップをもつ母系成員が、ことさらに村の中核を形作るとはかぎらない。村をなす大家族は勿論同じ村の土地を耕し、その收穫を消費する。しかし村の居住者の構成が右のごとくであるから、彼らのすべてがこの村の土地を所有し、またあるいは相続することができるわけではない。

村の土地を所有する母系リニージのメンバーにあらざる者が、

冥福は、葬儀に際して、死者の母系リニージが振舞う饗宴の量によって定まると考えられているが、この場合に要する費用（豚と貝貨）を、死者（父）の子供たちが負担することによつて、子供達は亡父の村に住み、その土地を恒久的に耕作する資格を、亡父の母系リニージによつて認められるのである。かくてこの場合には、出自上の他所者が、母系リニージの土地所有に介入し、本来の土地所有原理をくつがえすことになる。

他の一つは、特定の婚姻方法によつて、村の成員流動を抑制することである。すなわち、特定の二つの母系リニージ（たとえば犀鳥族と鷺族）の間で、交叉イトコ婚を代々続けていくならば、この関連の中における個人は、誰をとつても、つねに、父の村の土地には関与できない代りに、自分の子供は自動的にこれを享受し（祖父と孫はつねに同一母系リニージのメンバーとなる）、したがつて、子供の父たることにより自分の地位は保障され、ことさらに父の村に土地を購う必要がない。換言すれば、いかなる時期においても、たとえば鷺族の土地は犀鳥族に属する配偶者を伴なつた鷺族員の手の中にあり、不妊ならざる女子メンバーをもつかぎりにおいて、土地が鷺族外の手に渡ることは起りえないわけである。実際このようにして数世代を経過すると、元来それぞれ鷺族および犀鳥族に別個に属した土地が、やがて一つものに合体されて、「鷺族および犀鳥族の土地」とみなされるに至る。この社会にかような例は決して珍らしいことではないと、原報告者は述べている。

交叉イトコ婚を代々繰返していくかのような慣行において、わ

村に居住しこれを耕すことは、村本来のメンバーの配偶者または子供であることによつて許されるが、もとよりこれは権利ではなく、たとえばこの村の母系リニージの成員である男が死亡すれば、その寡婦および子供たちは、もはやここにどまつて土地を使用することができず、彼女およびその子供たちの母系リニージの村へ帰らねばならないのである。逆に村の母系リニージの女が死亡した場合には、その寡夫は、子供を持つ場合にかぎり、その子供（母系出自によりこの村にメンバーシップをもつ）の父たることによつて、ここに伴ひ続けることを許されるが、子供を欠く場合にはこれを去らねばならない。いずれにせよ、村の母系リニージのメンバーである夫または妻の死去に伴ない、その配偶者（および時として子供も）が村を去らねばならないということは、この社会の血縁（出自）にもとづく土地所有原理を貫徹するかぎりにおいて、避けられぬ事態なのである。

しかしながら、かような原理の貫徹が、一面において日常生活秩序と相克しがちなことは、およそ推測するに難くないところであろう。さればこそ、この社会にソロレイト婚およびレヴィレイト婚が稀でないと報告されているのも、むしろ当然のこととして理解されてくるのである。けれども、母系原理なるがゆえに、子が父の村に土地を相続しえないという事態だけは、ソロレイト婚、レヴィレイト婚を以てしても解決できない。

この点について注意をひくのは、次の二つの慣行である。

その一つは、特定の支払方法によつて、父の村の土地が購なわれうることである。すなわち、この社会では、死者の後生の

れわれは、シウアイ族の社会に起りがちな二つの好ましからぬ事態が、同時に救済されることをみる。すなわち、一つはこれによつて亡父の村の土地を相続するための手続きが不要となり、人はそのために自からの動産（豚および貝貨）を失なうことを免れ、一つには、これによつて村の成員構成の安定を攪乱することが防がれ、個人間の関係および人と土地との結びつきが強固にされることである。この慣行は甚だ有用な考案であつたといわねばなるまい。

【事例一五】 カオカ

ソロモン諸島でブーゲンヴィルに次ぐ大きな島は、ガダルカナル Guadalcanal である。この島の北東部に住むカオカ Kaka 語を使用する人々について、ホグビンが一九三三年に調査を行なった⁽²⁸⁾。彼の調査の足跡は、「事例一五」に挙げたニューギニア北岸のウオゲオや、次の例で触れるマライタ島も含めて、おそらくメラネシアの全域に及ぶほど広範囲にわたっており、現存するメラネシア研究者のうち、権威の名にふさわしい一人であろう。平均人口一七五〇〇人の村が、最大の政治単位をなしてまとまるが、その内部はさらに数個の小集落に分れる。そして、この小集落が、日常生活において村以上に強い共同性を帯びているのである。五個の母系氏族が村々にまたがって分布し、一つの村はこのような複数の母系氏族の分節Ⅱ亜氏族の集合によつてできている。この亜氏族がそれぞれに集落をなすのである。この場合、一つの氏族の亜氏族が、一つ村の中にたゞ一個

とはかぎらず、二個以上含まれることもある点に注意を要する。たとえば、ある一つの村にA、B、C、Dの四個の集落があったとすると、それぞれが別個の氏族の分節をなすとはかぎらず、A、Bは氏族を異にするが、CとDは同一氏族の分節であるということもあるのである。土地は氏族の所有にかかり、その所有地は、氏族を構成する庶民族の所在地ごとに分散している。原理上は、同一氏族の土地であるかぎり、他の村に在るものでも利用できるが、実際には地理上の制約から、こうした利用はほとんどなされない。氏族有地と並んで、村有地もある。川の中洲がそれで、これは氏族所属の如何を問わず、村人すべてが随意に利用できるものとされている。

土地の相続は、母系の原理に依じて、母方オジからオイへ相続されることを原則とする。しかし、村の内に複数の氏族を含むために、村内婚が広く行なわれる結果として、母方オジとオイとは同一村内に住むことが多く、したがって、オジ方居住を行なっても、集落を移るだけで、村まで変える必要はない。また、父と母とが出身村を異にする場合でも、母の所属する氏族（息子もまたこれに属する）の分節が、父の村にも在る場合には、ここに氏族の土地をえられるから、わざわざ村を移ってオジ方居住をする必要もないのである。

三、双系制社会の場合

〔事例一六〕 トアムバイタ

メラネシア社会では、血縁関係を規定する出自原理が、父系

か母系かの違いはあるにせよ、卓越的に単系的であることを特色としている。双系制の例は稀である。しかし、皆無というわけでもなく、そうした例として、ソロモン諸島のマライタ⁽²⁹⁾や「Eia」島の場合が知られている。これは、ホグビンの一九三三年の調査によって有名になった。彼が王として調査したのは、北部マライタの内陸山岳地域に居住するトアムバイタ Toam-baita 語を使用する住民である。⁽³⁰⁾

トアムバイタの村は孤立荘宅を営んで景観的に村としてのまとまりを示さない。しかも、ここにはこれまでに挙げたどの例とも異なつて、単系血縁集団が存在しない。代りに双系的な親族が寄つて村をなすのである。ごく近い近親者間の婚姻が禁じられるだけで、村に双系血族内婚は許容されている。すなわち、この村はマードックのいわゆる *deme* に近いものである。このかぎりにおいては、村内に住む者すべて——夫も妻も子も——が、村のメンバーシップを持つ。しかし、過去においても時として村外婚が行なわれたため、双系の系譜をさかのぼっていくならば、人は祖先の誰かゝつて住み、そこに埋葬されている相当数の村々と関連づけられることになり、それらの村のすべてに対しても、潜在的なメンバーシップを認められるのである。人はそれらの村々のどれにでも移住し、家を建て土地を耕す権利をもつ。

しかし、これは原理としてであつて、必ずしも頻繁にこの権利が実行に移されるわけではない。現実には、財産の相続が父系を辿るために、夫方居住婚が行なわれ、男が父の村を去るこ

とは余りみられないし、また、村外婚も自由であるため、居住する村にメンバーシップを持たない妻も多く、村の実情はマードックのいわゆる *deme* よりも、むしろ父系の *local clan* に近いものと考えられるのである。

一方、各村は時折、その村の墓地にねむる祖先の祀りを営む。そして、その際参集すべき双系のすべての子孫のうち、遠い村に住むなどの理由で欠席した者は、自動的にその村に対する潜在的メンバーシップを失なうものとされている。かくて、村の現実のメンバーは、流動よりもむしろ固定化への傾向をもち、ホグビンの述べるように、村の地理的境界が同時に社会的境界をなすともできるのである。

三 土地所有の原理

前節に列挙した諸事例のあいだには、各報告者の関心の程度に応じて、土地所有に関する記述に精粗の差のあることを認めなければならぬ。また、報告されたすべての事例が、〔事例八〕カバウタの場合のように、原住民が欧人によって発見されたその時点（つまり、純粹な伝統文化の状態）で記述されたものばかりともかぎらない。報告者は種々の方法によって、つとめて土着文化の伝統的な形相をたぐり出して、記述しようと努めるが、そうした試みもつねに成功しているとはばかりはいえない。しかしながら、そのような資料的制約にもかかわらず、なおかつ諸事例を通じて共通してとらえられる事実があるとするならば、そこにメラネシアの伝統文化の本質を認めてもさしつ

かえあるまい。

土地所有の原理がそれである。それはまた、村のメンバーシップと言ってもよい。メラネシアの村では土地所有の権利をもつもののみが、正規の村人とみなされているからである。

一、血縁（出自）と土地所有

村が都市と異なり、自由な個人の偶然の集合体でなく、村人のメンバーシップが一定の規律にもとづいて要請される事実、つい先頃までわが国の農村などにも、いわゆる「村入り」の慣行などの形でかなり広く行なわれていた。村のメンバーシップの問題は、決して珍らしいものでない。しかし、メラネシアの諸事例においては、このメンバーシップが元来血縁（出自）にもとづき、実際にその村に住むか否かの居住の事実、ほとんど制約されぬ性質のものであることが、一貫して認められるのである。〔事例三〕クトップのように、他村に永住する者の、故郷に対するメンバーシップが時とともに忘れ去られて、子孫に継承されぬ例や、〔事例一六〕マライタのように、潜在的メンバーシップを保持し続けるためには、定期的にその土地を訪れる必要があるという例は、居住の事実が全く無意味でもないことを示しているし、また、〔事例一〕ワバガ、〔事例四〕アベラム、〔事例七〕ガリア、〔事例一四〕シウアイの諸例のように、本来メンバーシップをもたない居住者が、何らかの手段によってそれを獲得する場合もないではない。しかし、それにもかかわらず、土地所有の資格を裏づけるものが、父系にせよ母系にせよ、あ

るいはまた双系にせよ、特定の出自につながるものであることは明らかであり、村にメンバーシップを獲得した部外者にして、一旦それを獲得してのちは、その出自に沿う子孫だけが、それを相続することができるのである。

土地所有Ⅱ村のメンバーシップが、出自によって規定されることを示す最良の例を、「事例五」ウオゲオと「事例六」マナムにみることができる。ウオゲオでは、土地が女子によって変則的に相続されたために結果した、異分子の介入という異常事態を、特殊な婚姻規制によって、やがて原状に回復するよう図られていた。女子の土地相続が正当であるマナムの場合には、既婚女子が婚家の村の畑を耕作する一方で、生家の村にも自分の耕地をもつことができ、実際に両者をかけ持ちで耕作していた。母系制であるために、父の死とともに父の村と一切の縁を断たれる「事例九」ドブ、同じく母系制であるために、結婚とともに父のもとを去り、母方オジの村に身柄を移すものとされている「事例一〇」トロブリアンドや「事例一一」クアヌア、さらにまた、結婚によって妻の村に住む男子が、出身村の土地処分の代金の分配にあずかる一方、現に居住する妻の村のそれにはあずかりえない「事例一二」レズなどの諸例も、いずれも、土地所有Ⅱ村のメンバーシップの根本原理が、居住ではなくて出自にあることを明示している。

二、土地所有の分化

土地所有Ⅱ村のメンバーシップの根本原理が出自にあるとい

って、同一氏族員であつても所属する下位集団を異にする者は、その資格をもたない。ただし、カオカだけは例外的にこれを許している。前記したタンガやワバガの特例も併わせて、こうした事実の意味を考えてみると、それは、土地所有の主体が次第に上位の出自集団から下位のそれへ移行していく、歴史的な過程を暗示するもののように思われる。

レズが村のすべての可耕地を出自の異なる集団間で共有し、また、ウオゲオとカオカでも、一部の土地について同様の事実が認められるということは、一見、土地が出自にかかわらずなく、地域集団としての村によって所有されていることを思わせるが、この場合にも、その土地に対する個人の権利は、彼がその土地に関係ある幾つかの出自集団のうちのどれかに所属することによって、はじめて認められるのであり、出自集団をはなれた抽象的な村人としての権利ではないことを、見逃してはならない。それにしても、こうした異集団間にみられる土地所有の権利の合体現象を、どのように解釈するべきであらうか。一つの歴史的な形態であるのか、あるいは、土地の広狭・肥瘦や焼畑の技術などのエコロジカルな条件に規制された、地理的な現象であるのか、こうした点の究明は今後の詳細な調査にまたねばならないが、いずれにせよ、土地という最も重要な生産手段を共有することによって、異集団間に当初存在した異和感が漸次薄れていくであろうことは、充分に予想されるところである。「事例一四」シウアイにおいて、犀鳥族と鷺族とが交叉イトコ婚を継続していくことによって、本来所有を異にする二つの土地を、

うことは、具体的には、特定の土地が特定の出自集団によって所有されるという形態を意味する。前記の諸事例を整理すると、その形態にさらに二つの型を区別することができる。

(1) 氏族にせよリニージにせよ、それが一個で村をなす型。
「事例一」ワバガ、「事例二」メンディ、「事例八」カバウク、「事例九」ドブ、「事例一〇」トロブリアンド、「事例一二」タンガ、「事例一四」シウアイがこれに属する。この型では、村の土地は一個の氏族もしくはリニージによって所有される。タンガのみが例外的に、他の村に住む同氏族と採集狩猟場を共にしているが、しかしこの場合にも、可耕地については、村ごとに所有が分化している。村の土地を所有する氏族が、その内部をさらに亜氏族やリニージに分化している場合には、一部を氏族の共有地とし、他を下位集団別に分割している(ワバガの例)。

(2) 出自を異にする複数の氏族・亜氏族もしくはリニージが村をなす型。
「事例三」クトシバ、「事例四」アベラム、「事例五」ウオゲオ、「事例六」マナム、「事例七」ガリア、「事例一一」クアヌア、「事例一二」レズ、「事例一五」カオカがこれに属する。この場合には、出自を異にする集団ごとに、所有地が別かれる。ただし、ウオゲオとカオカは一部に共有地をもつ。また、レズは例外的に、すべての可耕地を出自の異なる集団間で共有している。

以上の二つの型のいずれの場合でも、土地が下位の出自集団(亜氏族またはリニージ)別に細分化されているときには、その土地に対して関与しうるのは、当該下位集団の成員だけであ

やがて一つものとなるようになる事実も、ここに想起されよう。

土地が下位の出自集団に細分化されるだけでなく、さらに個人別あるいは家族別に細分化される例も、「事例二」ワバガ、「事例五」ウオゲオ、「事例七」ガリア、「事例一一」クアヌアの場合にみられる。こうした事実を以て、直ちに私的所有の存在を示すものと即断する誤りを犯してはならない。個人的持分に対しては、同じ下位の出自集団員であるならば、本人の了解のもとにその土地を利用することができるのである。しかし、氏族を等しくするというだけでは、これに関与できない。さらにまた、私的所有に対する反証として、ガリアやクアヌアの例において、個人的持分である個々の土地片に、すべてリニージ名や集落名が付されている事実を、指摘することができる。要するに、個人的持分の上で下位出自集団の規制が働いていることは明瞭であり、そこに私的所有を認めることはできない。ところで、個人的持分に対する規制が下位の出自集団ほど強く、上位の出自集団(氏族)においてはほとんど無いに等しいという事実は、土地所有の主体が次第に下降していく傾向を、またしても暗示するものである。

四 村安定の条件

土地所有Ⅱ村のメンバーシップが、血縁(出自)原理にもとづくものであるならば、一つ村に関してここに二つのグループが並存することとなる。一つは村の現実的居住者のグループで、彼らは必ずしもこの村のメンバーシップをもつ者ばかりとはか

ざらないが、地域集団としての村を構成すべき者は彼らである。他の一つのグループは実際の居住の有無にかかわらず、終始この村のメンバーシップを所有するグループで、彼らは元来地域集団でなく、特定の出自に規定された血縁(出自)集団である。マードックは彼のいわゆる(31)の地域集団的側面に注目しつつ、これを血縁集団としての氏族の機能と比較し、前者が主として経済的・政治的・軍事的面で機能するのに対し、後者はトーテミズム・儀礼・婚姻および相続の調整に関係するとして、両者の機能分担を述べているが、それぞれの集団的統制という観点に立つとき、両者は互に矛盾しがちである。であるならば、メラネシアのように血縁集団が扱かう相続事項の中に、土地所有の村のメンバーシップが含まれるときには、地域・血縁両集団間の矛盾は一段と増大しがちであろう。と同時に、一つの村をめぐることの二つの集団の重なり具合の如何によつては、逆に地域集団の安定ないし結合も、一段と強固さを加えるに違いないまい。

一、村内婚の場合

村のメンバーシップをもつ(土地所有)グループと、現実の居住者グループとの重なり具合は、一つ村に出自を異にする複数の土地所有グループが存在するか、あるいはそれがな一つだけであるかによつて事情を異にする。前者の場合には、村内婚が可能であり、事実そうすることが多いから、両グループのズレは一般にきわめて小さい。婚姻居住がどのような様式を

とるにせよ、身柄を婚家に移す配偶者も、たゞ住居や集落を変わるだけで、同一村内にとどまることに変りはない。したがって、村の成員構成は安定的であり、地域集団としての村の統合が期待されよう。「事例一四」シウアイの犀鳥族と鷲族の關係のように、元来自集団別に分割されていた土地が、一つものとして合併されることも起りうる。しかしその反面、複数の出自集団が一つ村を構成することは、その契機さえあるならば、分裂の危険もはらむものである。

二、村外婚の場合

村が単一の土地所有グループ(血縁II出自集団)に所属する場合には、そのメンバーが必ず外婚を強いられるから、村の居住者中に相当数の他所者を含むことになる。つまり、村のメンバーシップをもつグループと、現実の居住者グループとのあいだに、かなりのズレを生ずるのである。このズレの性質と量が、出自と婚姻居住様式の組み合わせによつて決定されることは、さきに掲げた諸事例から明らかであろう。「事例一」ワバガのような、父系出自で夫方居住の村では、村のメンバーシップをもつ男性がすべて、生涯を同一村内に過すのに対して、女性は婚前・婚後で居住する村を変える。婚前の村に彼女のメンバーシップがあり、婚後の村にはそれがない。「事例二〇」トロブリアンDのような、母系出自でオジ(母側)方居住の場合には、男性は自分とメンバーシップを異にする父の村に生をうけ、ここで幼少年期を送った後に、適令期に及んで母方オジのムラに移り

住む。彼のメンバーシップはこの村にある。一方、女性についてみると、幼少年期を父の村に送ることは男性の場合と変らないが、結婚して住む村もまた夫のものであつて、彼女自身の村ではない。つまり、生涯を通して、メンバーシップをもつ村に住むことがないのである。

村が単一の母系集団に属し、妻方居住を行なう例は、われわれの資料中には見いだされない(「事例二二」レズは母系出自・妻方居住であるが、出自を異にする複数の母系集団によつて村が構成されている)。かりにこのような場合を想定するならば、そこでは女性が生涯を自分の村に過すのに対して、男性は結婚とともに、メンバーシップを持たぬ村へ婚出していくことになる。

ところで、メラネシアにおいても、他の多くの未開社会と同様に、社会生活で中心的役割を果たすものは男性である。農業労働に女性もまた大きな役割をつとめていることを否定できないにしても、経済・政治・宗教儀礼など、社会生活の諸分野が男性の活動を中心に営まれている。したがって、上記のような母系出自で妻方居住の村は、村内に居住するすべての既婚男子が他所者であるから、生活の円滑な遂行に多大の支障をきたすことになる。マードックの統計的な調査によると、世界各地から選ばれた二五件の母系出自・妻方居住制の社会のうち、二二件までは、村のうちに複数の出自集団を含むことによつて村内婚を行ない、村が単一の母系集団から成るために村外婚を行なっているケースは、たゞ三件にすぎないと報告されている(32)。

後者の場合の生活遂行上の支障を思えば、当然の結果である。

その点父系出自で夫方居住の村は、村内に居住するすべての既婚女子が他所者であるにせよ、村内に居住するすべての男子は、既婚未婚を問わず、一様にその村にメンバーシップをもつから、生活の支障がほとんど無いと言つてよい。オジ(母側)方居住の場合もこれに近いが、ただし、これにあつては、男子といえども、度はムラを移るわけであるから、夫方居住の場合にくらべて、それだけ成員構成の安定が劣ると言わなければならない。

さて、このようにみると、村が単一の土地所有グループ(血縁II出自集団)に所属し、それでいて最も安定し、かつ統合度の高いための条件として、父系出自と夫方居住の組み合わせを指摘することができよう。このような組み合わせをとるとき、村のメンバーシップをもつ(土地所有)グループと、現実の居住者グループとのあいだの構造的・機能的ズレ(II矛盾)を、最少限にいくとめることが可能となる。

註(1) Codrington, R. H.: *The Melanians*. Oxford, 1891.

(2) Klantschken, A.: *Die Kantenbewohner der Gazelle-Halbinsel*. Hirtup, 1906.

(3) Ivens, W. G.: *Melanesians of the Southeast Solomon Islands*. London, 1927.

(4) オーストラリアおよび西イランを除く、オセアニア原住民に関する文献は、Taylor, C. R. H.: *A Pacific Bibliography*. Revised Edition. Wellington, 1965 によつてとんと網羅されている。西イランに関しては Galis,

K. W.: *Bibliography of West New Guinea*. New Haven, 1956.

- (5) New Guinea Research Unit Bulletin. 一九六八年一月四日発行に五冊目を行なっている。
- (6) Hogbin, H. I. & C. H. Wedgwood: "Local Grouping in Melanesia." *Oceania*, Vol. 23, 24, 1953.
- (7) Schlesier, E.: *Die Grundlagen der Klanbildung*. Berlin, 1956.
- (8) Hogbin & Wedgwood の分類表はこうだが、その中に多少触れたところがある。石川栄吉「原始農耕民族における居住規制と村落」『研究』(神戸大学文学会)第八号、一九五五年。
- (9) 中央高地全般の文化の展開について、著者の見解をこう述べている。Read, K. E.: "Cultures of the Central Highlands, New Guinea". *Southwestern Journal of Anthropology*, Vol. 10, 1954. 444頁 Watson, J. B.: "Anthropology in the New Guinea Highlands". *American Anthropologist*, Vol. 66, No. 4, Pt. 2, 1964. 482頁。
- (10) Elkin, E. P.: "Delayed Exchange in Wabag Sub-District, Central Highlands of New Guinea, with Notes on the Social Organization." *Oceania*, Vol. 23, 1953.
- (11) Goodenough, W. H.: "Ethnographic Notes on the

- Mae People of New Guinea's Western Highlands." *Southwestern Journal of Anthropology*, Vol. 9, 1953.
- モルキンギとミナミエナラの記述については、それぞれ左の文中で紹介したところがある。石川栄吉「原始農耕民族における居住規制と村落」『研究』第八号、一九五五年。「メラネシアにおける共同体的土地所有について」『民族学研究』第二二巻第二号、一九五七年。
- (12) Ryan, D. J.: "Clan Organization in the Mendi Valley, Southern Highlands of Papua-New Guinea." *Oceania*, Vol. 26, 1955.
 - (13) Williams, F. E.: "Native of Lake Kutubu, Papua." *Oceania*, Vol. 11, 1940—41.
 - (14) Mead, M.: *Sex and Temperament in Three Primitive Societies*. New York, 1935.
 - (15) Kaberry, P. M.: "The Abem Tribe, Sepik District, New Guinea." *Oceania* Vol. 11, 1941. "Law and Political Organization in the Abem Tribe, New Guinea." *Oceania*, Vol. 11, 1941.
 - (16) Hogbin, H. I.: "Tillage and Collection. A New Guinea Economy." *Oceania*, Vol. 9, 1938—39. "Native Land Tenure in New Guinea." *Oceania*, Vol. 10, 1939—40. この二つの土地所有に関する記述は、それぞれ文中に述べたところがある。石川栄吉「メラネシアにおける共同体的土地所有について」『民族学研究』第二二巻第二号、一九五七年。

三冊、一九五七年。

- (17) Wedgwood, C. H.: "Report of Research in Manen Island, Mandated Territory of New Guinea." *Oceania*, Vol. 4, 1934. "Manan Kinship." *Oceania*, Vol. 25, 1959.
- (18) Lawrence, P.: *Land Tenure among Garia. Canbera*, 1955.
- (19) Pospisil, L.: *Kapauku Papuan Economy*. Yale Univ. Puls. Anthropol. No. 67, New Haven, 1963.
- (20) Fortune, R. F.: *Sorcerers of Dobu*. London, 1932.
- (21) Benedict, R. F.: *Patterns of Culture*. Boston, 1934.
- (22) Malinowski, B.: *Argonauts of the Western Pacific*. London, 1922. *Crime and Custom in Savage Society*. London, 1926.
- (23) Trevitt, J. W.: "Notes on the Social Organization of North-East Gazelle Peninsula, New Britain." *Cecania*, Vol. 10, 1940.
- (24) Powdermaker, H.: *Life in Lesu*. London, 1953.
- (25) Bell, F. L. S.: "Land Tenure in Tanga." *Oceania*, Vol. 24, 1953.
- (26) Thurnwald R.: *Forschungen auf den Salomonischen und dem Bismarck-Archipel*. 2 Bde. Berlin, 1912.
- (27) Oliver, D. L.: *Studies in the Anthropology of*

Bougainville, Solomon Islands. Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Papers, Vol. 29, Nos. 1—4, 1949.

- ハンニエという村は、かつて次の文中に記述したところがある。石川「メラネシアにおける共同体的土地所有について」『民族学研究』第二二巻第二号、一九五七年。「原始農耕民族におけるメラネシアと共同体」『人文地理』第一〇巻第二号、一九五八年。
- (28) Hogbin, H. I.: "Social Advancement in Guadalcanal, Solomon Islands." *Oceania*, Vol. 8, 1938. Hogbin: *A Guadalcanal Society*. New York, 1964.
 - (29) Hogbin, H. I.: *Experiments in Civilization*. London, 1939.
 - (30) エンパイタという村は、かつて次の文中に記述したところがある。石川「原始農耕民族における居住規制と村落」『研究』(神戸大学文学会)第八号、一九五五年。
 - (31) Murdock, G. P.: *Social Structure*. New York, 1949, p. 62. 戦後内戦と関係した社会的組織集団を指す。
 - (32) Murdock, G. P.: *Social Structure*. New York, 1949, pp. 67 ff.
 - (33) Murdock, G. P.: 同前、p. 75.
 - (34) Murdock, G. P.: 同前、p. 214.
- 別表教授の調査を基にして、この一文を同教授にお借りしたところである。